B—85 色彩嗜好に関する分析的研究（第1報）
服装選択時における感情的要因

東京家政学院短大 今井 弥生

1. 各人が服装における色彩を選択するにあたり、どのような感情的要因が存在するかについて検討した。
2. 被験者は短大家政科学生 100 名（19～21歳）に対して、服種別・季節別に好みの色を選ばせた。その色彩

について30の形容詞による評定をおこなわせた。この評定は5段階尺度を用いた。色彩の観察条件は、室内、北窓自然昼光下において照度500 LXである。試料および分類方法は調査用カラー・コードによった。なお、1965年10月に実施した。

3. 30の形容詞について成分分析をおこなった結果、次の3つの主成分が抽出された。

第1主成分は、30の形容詞いずれとも正の相関を示す。これは服装選択時における基本的態度の軸であると思われる。

第2主成分は、平凡的・個性的といったタイプをわける軸であると考えられる。正の相関を示す形容詞は清潔な、新しい、似合ったなどであり、負の相関を示すのは知的な、印象的な、繊細ななどである。

第3主成分は、同調的・誇示的といったタイプをわける軸であると考えられる。前者は新しい、流行の、似合った、美しい、若々しいなどに対して、後者は独創的な、個性的な、高級な、洗練されたなどである。

この第2、第3主成分について、個人のスコアを求め、各人が選択した色彩との関係を見ると、いくつかの類型が認められた。